22　次の文章を読んで設問に答えよ。なお、設問の都合で送りがなを省いたところがある。

〈北海道大〉二〇二三年度出題

　丁　　年　七　月　初　六　日、蘇　　　。百　姓　皇　、　二 ａ　大　王　之　一。 大　王　　レ 　而　　、「　　二 老　一 、皆　二 　大　一。　二 　一 レ 、二— — 　大　一 也。」衆　　、ｂ斉　二 大　老　一、雪 ｃ立　。イ由レ 此　観レ 之、　　レ 、ｄ宜　乎　二 下　一 者　之　  
レ 　　矣。

　異　史　氏　、「世　風　之　 也、　 ｅ益　、　者　益　。　　　四　十　余　年　、　　之　レ 、　レ 　也。…（中略）…

　　時、上　レ 二 　　大　学　一。ロ説　　、『学　士　　二 大　名一、臣　二 　一。』 今　之　、　レ 。　二 於　小　人　之　一、而　　得二 　者　之　一、レ 　レ 、而　　 者　　二 天　一 矣。　、数　年　以　後、レ 　者　　　而　、レ 　者　　　而　、　レ 三 　上　二 　尊　一。ハ二 　一レ 　已。」　　　　　　　（『』）

注　丁亥年＝清の康熙四十六年（一七〇七年）。

蘇州＝州名。行政区域の一つ。

皇駭＝おそれおののく。

大王＝その土地の鎮守神のようなもの。

老爺＝だんなさま。お役人さま。身分が高い人への敬称。

消不得＝欠かすことが許されない。

悚然＝恐れてびくびくするさま。

治下部者之得車多＝『荘子』列御寇篇に見える、治療に王の身体の下部（尻の痔）をなめることまでして褒美の車の多さをほこる者がいるという話で、諂う者と諂われる者との双方をしている。

異史氏＝『聊斎志異』の作者、蒲松齢の号。

不古＝もとの状態が失われる。昔の純朴さがなくなる。

張説＝人名。

従＝「従来」と同じ。

造＝「至」の意。

匪夷所思＝凡人の考え及ぶところではないの意。

問１　傍線部ａ「諸」・ｂ「斉」・ｃ「立」・ｄ「宜乎」・ｅ「益」の読みを送りがなも含めて記せ。

問２　傍線部イ「由此観之」をひらがなのみで書き下せ。

　　（例）　学而時習之→まなびてときにこれをならふ

問３　傍線部ロ「説辞曰、『学士従無大名、臣不敢称。』」を現代語訳せよ。

◎問４　傍線部ハ「匪夷所思已」とあるが、何が凡人には考え及ばないのか。全体の趣旨を踏まえて、七五字以内でわかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝これを　　　　　 ｂ＝ひとしく　　ｃ＝たちどころに

　　　ｄ＝べなるかな　　ｅ＝ますます

問２　これによりてこれをみれば（これによりてこれをみるに）

問３　Ａ張説が（それを）辞退して言うことには、Ｂ「学士には従来『大』とつく称号はありません、Ｃ（ですから）私は（大学士という）称号をお受けしようと思いません。」と。

Ａ＝３〔「辞退して」は「断って」なども可。目的語は書かなくても可。〕

Ｂ＝４〔「大学士」という称号が存在しないという要素がなければ不可。「称号」は「呼び名」「敬称」「尊称」なども可。〕

Ｃ＝３〔「お受けしようと思いません」は「名乗るつもりはありません」なども可。〕

問４　Ａ目下の者はい、目上の者はり高ぶる風潮の中、Ｂ過剰な称号がつけられる傾向が加速しているため、Ｃ「大」の次にはどのような称号がつけられるのかということ。（74字）

Ａ＝３〔「過剰な称号がつけられる傾向」にある背景について言及できていなければ不可。「目上の者」「目下の者」は「身分の高い者」「身分の低い者」なども可。〕

Ｂ＝３〔「過剰な称号がつけられる傾向が加速している」という要素がなければ不可。「爺」から「老」、「大」への変化を具体的に説明していても可。〕

Ｃ＝４〔凡人の考え及ぶところではない対象が「まだつけられていない『大』のさらに上の称号」であることが説明できていなければ不可。〕

【書き下し文】

　の、にいにふる。し、に問１ａをのにる。大王ちにきてひてく、「をするは、のをす。れがをてとすも、一の大字をざるなり。」と。として、問１ｂしく大老爺をべば、雪問１ｃちどころにむ。問２れにりてをれば、神もたはるるをぶ、問１ｄなるかなをむるのを得ることのきは。

　曰く、「のずるや、の者は問１ｅ諂ひ、の者は益る。ちのに、称のならざるは、だふべきなり。…（中略）…

　の、上にをへんとす。説して曰く、『士りて大く、て称せず。』と。の大は、か之を大とする。めのに由るも、りてき者のびを得、之にりてはずして、たる者ににし。かにふに、年、爺を称する者ずみてとなり、老を称する者必ず進みて大とならんも、だ大の上の称にるかをらざるのみ。のふにざるのみ。」と。

【現代語訳】

　清の康熙四十六年の七月上旬の六日、蘇州に大雪が降った。民衆はおそれおののき、皆で鎮守の神の廟に（雪が止むよう）祈願した。（すると）神がすぐさま人にのりうつって言うことには、「いまや、老爺と称する者は、皆『大』の一字を加えて（称して）いる。そもそも、私を神の『小』なる者だと見なし、『大』の一字を欠かすことが許されない」と。（それを聞いた者は）皆恐れてびくびくし、一斉に「大老爺」と叫ぶと、雪はたちまち止んだ。このようなことから考えると、神もまた（人と同様に）お追従を好む、（『荘子』にあるように）治療に王の身体の下部をなめることまでして褒美の車の多さをほこる者がいるという話ももっともであるなあ。

　異史氏（＝蒲松齢）が言うことには、「世の風習が移り変わったことは、目下の者はますますへつらい、目上の者はますます驕り高ぶる（ようになってしまったことだ）。康煕年間の四十年余りで、称号についてもとの状態が失われてしまったのは、はなはだ滑稽だといえる。…（中略）…

　唐の時代に、皇帝が張説に『大学士』の称号を与えようとした。（しかし）問３張説が（それを）辞退して言うことには、『学士には従来〈大〉とつく称号はありません、（ですから）私は（大学士という）称号をお受けしようと思いません』と。今日の『大』という称号は、（いったい）誰がつけたのだろうか。初めは徳のないつまらない人物のお追従から始まり、それが身分の高い者の喜悦を誘い、それをおかしいとも思わず、さまざまな場面で称号が用いられ、とうとう天下に広まってしまったのである。（私は）心ひそかに、数年後には、『爺』と称する者は必ず『老』に格上げとなり、『老』と称する者は必ず『大』に格上げになると思っている。ただ、『大』のさらに上の称号はどのようなものになるのか見当もつかない。凡人の考え及ぶところではないのだ」と。